

大博物館だよりの

NO.64

2010.3

津山郷土博物館



CONTENTS

■古写真紹介～失われた津山を求めて

藺田川旧三枚橋と賽神社～旧備前往来「富川宿(津山)村境」

佐野 綱由……………2～3

■江戸一目図屏風の現在

乾 康二……………4～5

■津山城下町成立期の城東地域

—「林田町」と「新町」をめぐる—

尾島 治……………6～8

電話機：妹尾武志家資料

古写真紹介 ～失われた津山を求めて

藪田川旧三枚橋と賽神社～旧備前往来「富川宿(津山)村境」

佐野 綱由

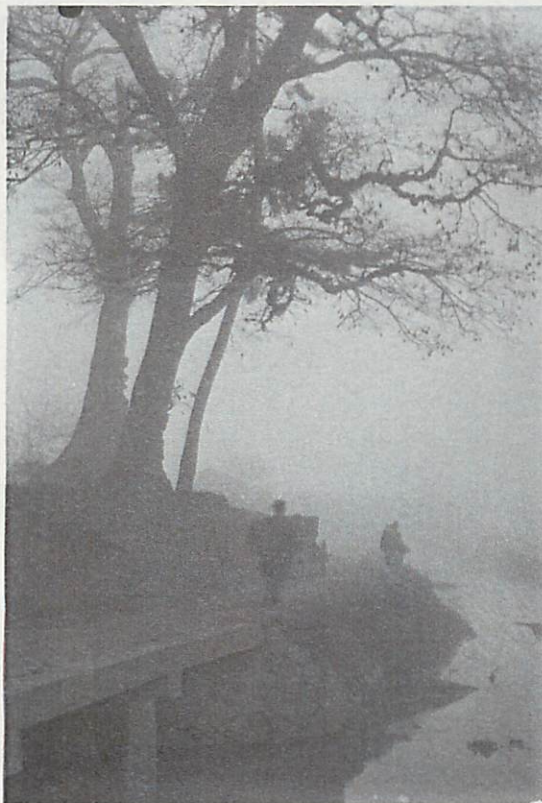


写真1：藪田川旧三枚橋と賽神社・大正10年ごろ・南新座
巨木の後ろに賽神社（道祖神）あり、村の入り口を意味する。
昔はこの下手に水車があった。現在の姿は写真7。

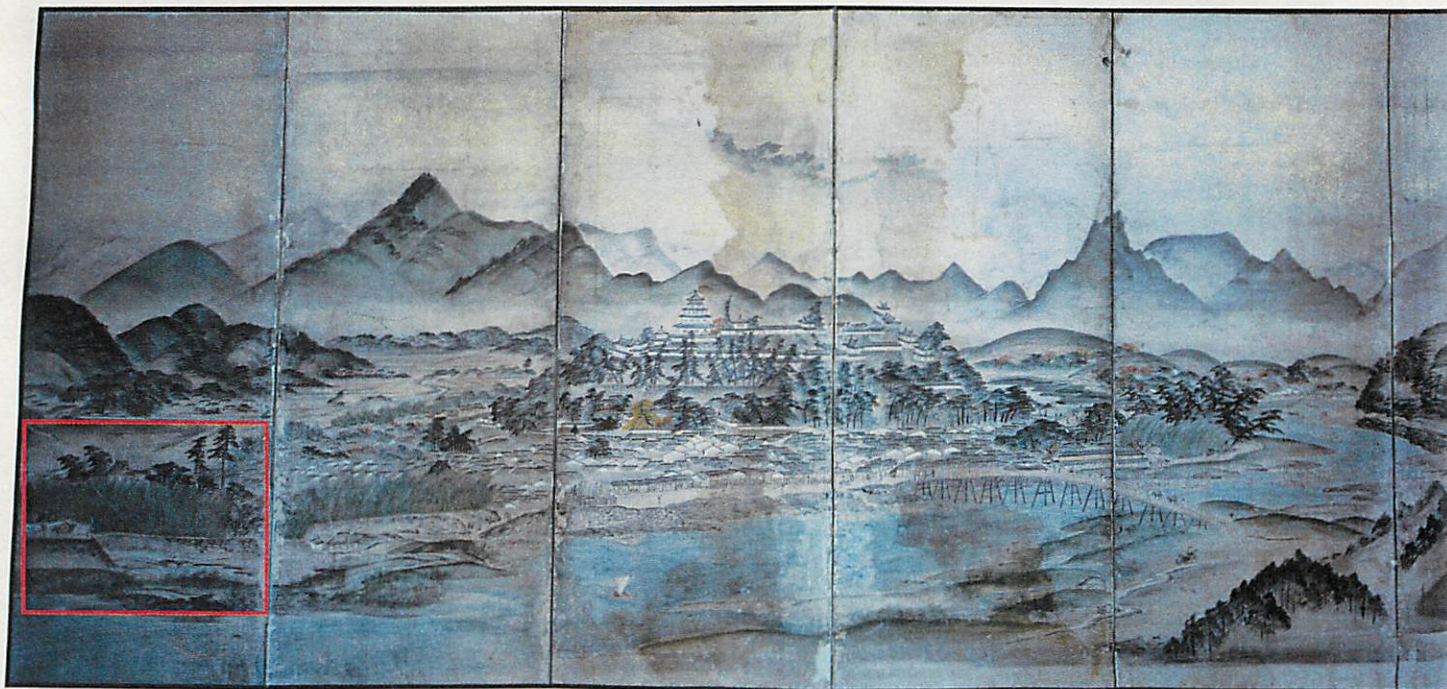
まず、写真1を見ていただきたい。この写真から現在の場所がわかる人は相当の津山通である。難易度トリプルAクラスの難問と言ってよい。

慶長9年（1604）、森忠政が城下町の建設を始めるにあたって、まず、小田中村の丘陵地から南流する藪田川の川筋を、田町の今の森林管理所の所で人為的に直角に曲げて西流させ、今の第一クリニックの所で再び直角に南流させ、さらに記念橋（泰安寺参道）で東へカーブさせて吉井川（津山川）に合流させた。

写真1の場所は、この吉井川・藪田川の合流点である。一部見えている橋は、藪田川に架かる三枚橋。左岸には小さいけれど、こんもりした鎮守の森があり、賽の神（道祖神）が祭られていた。すなわち、慶長の森氏による城下町建設までは、ここが岡山方面から津山（旧名・富川）に入る村境だったらしい（備前往来）。森氏以後、藪田川より西に鉄砲町ができ、後にはさらに安岡町まで城下になった。

ちなみに、江戸時代、参勤交代の大名行列が通る出雲往来に比べると、岡山方面へ行く備前往来は今ほど重要でなく、整備されていなかった。吉井川の、いまの津山口～鉄砲町間に広瀬という浅瀬があり、季節によって渡船か、仮橋が架けられたり、外されたりした。明治半ばに、少し上手に常設の橋が架かった。現在の境橋である。

「森氏は、鉄砲町と南新座の間の藪田川に、巨石3枚を並べて、長さ5間3尺（約10m）、幅1間（約1.8m）の石



橋を架けた」と津山誌（明治16年矢吹正則著）にある。三枚橋の名の由来である。また「以来修繕を加えず」とある。

文化7年（1810）頃、江戸から津山に来た藩のお抱え絵師、鋏形蕙斎は、2枚の屏風にパノラマ「津山景観図」を描いた。これの右隻（東半分）に三枚橋もちゃんと描き込んである（津山城も）。なお、左隻（西半分）に広瀬橋が描かれている（今回掲載なし）。**絵図写真2・5・6**。（個人より本館に寄託）。

ちなみに、蕙斎の絵には、三枚橋の西隣の鉄砲町に、五町場とよばれる、大砲の射撃訓練場が描かれている。ここから大谷の石山に向けて大砲を撃った。吉井川をへだてた距離が、五町あったからこの名がついたという。

写真1は、おそらく、大正12年の津山駅開業以前に撮られたもので、当時鉄道は現在の津山口駅が終着駅で、そこから津山に入るには、境橋を渡って、出雲往来の西今町経由で翁橋から入るか、備前往来の鉄砲町経由でこの三枚橋を渡るかしかなかった。橋は、その後、拡幅されたらしく、写真には、振り分け荷物の旅人や大八車が行き交う様子が写っている。また、昭和4年ごろの別の**写真3・4**では、荷馬車も行き交っている。面白いことに、荷物を背負って橋を渡る旅人の姿は、江戸時代の蕙斎の**絵図写真5・6**にも描かれている。

時代は変わり、吉井川の河川改修あたりの様子は一変した。賽神社も、昭和の初めまでこの場所にあった（**写真3・4**）が、現在は徳守神社に合祀されている。その後、土手は防災上どんどん高くなり、「三枚橋」も何度か架け替えられたらしく、森忠政の「巨石」を偲ばせる橋の名も、悲しいことに、「新橋」（昭和43年3月竣工）**写真7**という、なんのこともやわからない名に変えられてしまった。「巨石」の行方は誰も知らない。（写真提供：江見写真館・塩山剛さん）

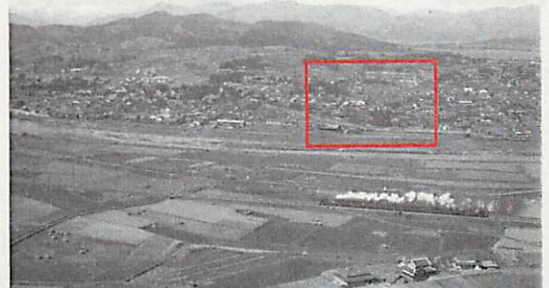
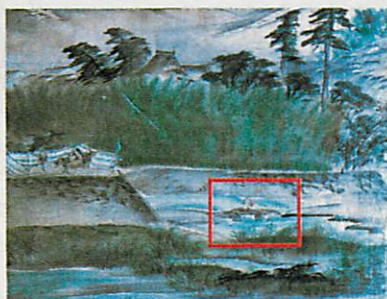


写真3：蒸気機関車逆走・昭和4年ごろ・旧津山町西部津山駅の転車台未整備（昭和5年設置）につき、機関車は岡山方面に尻を向けてピストン走行している。西小の講堂が見える（昭和2年完成）。



写真4：写真3の拡大・同・蘭田川河口三枚橋と荷馬車賽神社の森の下（手前）の道に右向き荷馬車が2台あり。左向き荷馬車が1台、橋にさしかかっている。後ろに徳守神社の森。その左に、白い中島病院本館の二階が見える。



絵図写真5：絵図写真2の拡大・徳守神社～五町場～三枚橋

藪の向こう、森の中に徳守神社。左右垣の上に五町場。大砲の射撃訓練中。右下に橋脚二つあり。この三枚橋が備前往来の本通り。護岸の上に藪と木立。

絵図写真2：津山景観図・文化7年（1810）ごろ・城下町東半分鋏形蕙斎筆。津山城を中心に、秋の風景を描いている。備中櫓も正面に描かれている。右の橋は、鍛冶場橋。いまの津屋橋より少し下手に架かっていた。北詰に高札場あり。手前、藪の向こうに、妙願寺の屋根。



絵図写真6：

絵図写真5の拡大・三枚橋と通行人

左向きに振り分け荷物の通行人が一人、橋を渡っている。橋は三枚の巨石を並べたもの。

写真7：現在の蘭田川河口・平成22年2月・新橋（旧三枚橋）

画面右の橋は今井橋。下は河岸緑地公園。右の高層ビルがアイマーレ、左がアリコペール。手前の橋は「新橋」昭和43年3月竣工。賽神社は、現在はここになく、徳守神社の境内にある。



江戸一目図屏風の現在

乾 康二

津山郷土博物館で所蔵する県指定重要文化財「江戸一目図屏風」は、文化の頃（1800年頃）の100万都市、江戸を俯瞰した風景画で、江戸全体を「一目」で見渡すことができるように描かれています。その中には250箇所もの江戸の名所が描かれており、そこに集う人々を精緻な筆で生き生きと描き出しています。それから200年あまりのときが過ぎ、現代の東京は当時の江戸とはすっかり様変わりしてしまいました。そこで、今回は「江戸一目図屏風」に描かれた場所の当時と現在を比較してみようと思います。

最初は、津山藩上屋敷のあった江戸城鍛冶橋門の跡です。鍛冶橋は江戸城外堀に架けられた橋で、枡形のある門を入ったすぐ右手が津山藩の上屋敷でした。一目図をよく見ますと、津山藩の上屋敷右の堀に沿って行列があるのを見ることができます。その行列の中ほど、画面右隅に黒く細長い塊があり、これが熊毛槍だとすると、この行列は津山藩のものであるということになります（図1-1）。

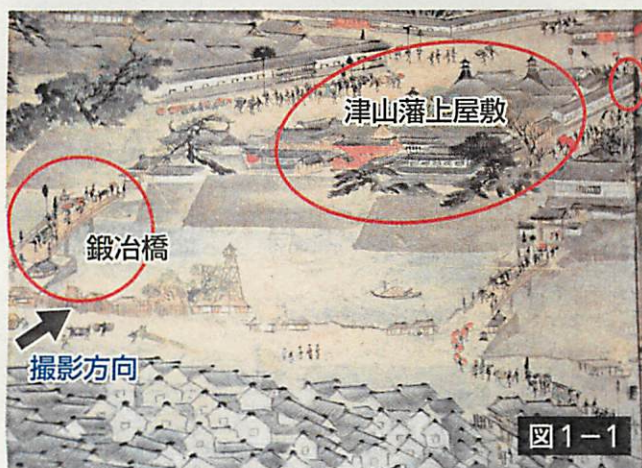


図1-1



図1-2

さて、この場所が現在ではどうなっているかといいますと、図1-2のように、まったくその面影も残っておりません。外堀は埋め立てられ、外堀通という道路になっており、橋の存在は交差点の名前として残されているだけです。画面奥側は線路敷になりますので、津山藩上屋敷は東京駅の敷地内になってしまいました。



図2-1

次に日本橋を見てみます（図2-1）。日本橋は江戸時代の五街道の基点があり、それだけに人通りも多く、江戸随一の繁華街ともいえます。

一目図に描かれた日本橋を見ますと、橋の上に天秤棒を担いだ棒手振りが列を為しているのがわかります（図2-2）。日本橋の北側には魚河岸があり、この棒手振りたちは魚河岸で魚を仕入れ



た行商人であろうと思われます。

この日本橋の現在は、**図2-3**の通りです。この構図は有名なので、見たことのある方も多しと思いのではないでしょうか。今架かっ

ている橋は明治44年に建設されたルネッサンス式のアーチ型石橋ですが、橋上に高速道路の高架があり、橋の存在は目立たなくなっています。

江戸時代の日本橋にあった商店として最も有名なものは三井越後屋でしょう。日本橋駿河町にあった三井越後屋は通りをはさんで呉服店と綿店がありました。一目図では画面左側、赤い旗が立っているのが呉服店でその向かいが綿店と考えられます (**図3-1**)。



三井越後屋は江戸本町1・2丁目に呉服店を開いていましたが、周辺商人の妨害に遭って、天和3年(1683)にこの地に移転してきました。「薄利多売・現金掛け値無し」「正札販売」の新しい販売形態で急成長し、その繁盛振りは「富士山」に例えられるほどでした。一目図では駿河町の通りを大名行列が江戸城に向かって進んでいく様子が描かれており、通行人の姿はあまりありません。

現在、越後屋のあった場所にはデパートの「三越本店」があります (**図3-2**)。三井越後屋は明治時代以降、三井家として金融業を事業の中心にすえました。それに伴い、呉服部門を「株式会社三越呉服店」とし、それが、今日の「三越」になります。



今回ご紹介した場所は、一目図の時代と現代ではまったく様子が違っていました。街が発展するという事は、古い時代の情緒を破壊していくことなのかも知れません。これは津山でも同じこととです。仕方がないことかもしれませんが、街を歩く際にその場所が昔はどうだったのか思いを馳せながら歩いてみるのも一興ではないでしょうか。

津山城下町成立期の 城東地域

——「林田町」と「新町」をめぐって——

尾 島 治



はじめに

城東地域の町並みの成り立ちについては、確実な資料が乏しく、限られた資料から考察を加えるしかないため、曖昧な点が多く残されている。これらを解明して確定するには、新資料の発見を期待するしかないが、細かい点については、資料の解釈から改めて考える余地があると思われる。

従来、城東地域六町の成り立ちを説明する根拠としては、『東作誌』等を参照して記述された、矢吹正則の『津山誌』が多く用いられてきた。矢吹正則は、歴史的にみても極めて実証的な記述をしているが、それでも、中には曖昧な部分が残されている。そのため、それを利用した後世の説明には、やはり、曖昧さが残る。

ここでは、『東作誌』に見られる「林田町」と「(林田)新町」という表現について考察を加えながら、城東地域の町並みの成り立ちについて考える一助としたい。

「林田町」と「(林田)新町」

宮川以東の林田郷では、津山城築城に合わせて、東西に延びる街道沿いに町人の家並みが形成され、元和3年(1617)には林田町ができたという(『東作誌』)。「東作誌」の記事では

「元和三丁巳年林田町落成」

とある。

その東には足軽町が形成されていたが、その後、足軽町の東にも新しく町人の町並みができていった。そして『東作誌』には、続けて

「寛永三丙寅年佐々木太郎兵衛と云ふ者願て新町を取立る然れども此頃は林田町新町の称のみなりしを追年六町に名目分れり所謂橋本町林田町勝間田町中之町西新町東新町是也」

とあり、新しくできた町並みが、寛永3年(1626)に城下町に繰り入れられた、とされる。

問題はこのふたつの記述の解釈である。従来の解釈では、元和3年(1617)に成立した「林田町」を、その後の町名の林田町と同じものと解釈していたが、この『東作誌』の記述からはそのように読むことはできない。後半の記述で、寛永3年(1626)頃には「林田町新町の称のみ」であったものが、後に六町に分かれていったとあるように、元和3年(1617)に成立した「林田町」と、その後の町名の林田町は別のものであると考えなければならない。すなわち、元和3年(1617)に成立したとされる「林田町」は、橋本町・林田町・勝間田町を含む総称としての「林田町」だということになる。だからこそ、後に中之町となる足軽町の東部に成立した町並みを「林田町」に対する「新町」と称したのである。この「新町」が、時には「林田新町」とも呼ばれたということになる。

このように町名の頭に地域の名称としての「林田」を冠することについては、その後にも見られる。

『武家聞伝記』巻第十四では、寛永5年(1628)春に「林田新町出来」とある。『東作誌』の寛永3年(1626)とする伝承とは食い違うが、町並みの完成と城下町への繰り入れという違いとも理解できる。いずれにしても『武家聞伝記』の記事だけでは判断できないが、同じ寛永期のことでもあり、『東作誌』の記事と合わせ

て考えると、この「林田新町」については、固有の町名ではなく、「林田」の「新町」と理解するのが妥当であろう。

同じように、寛永19年(1642)5月の記事に見られる「林田足輕町」(『武家聞伝記』卷第十四)、貞享4年(1687)4月には、「林田大橋」の渡り初めがあり、同年6月「林田勝間田町豆腐屋」とあることなどから(『武家聞伝記』卷第十七)、宮川以東の地名に関しては習慣的に林田を付けていたのではないかと思われる。

なお、『武家聞伝記』の寛永後半期の記事には、「林田町」が見られるが、これが、広い意味の「林田町」なのか町名の林田町なのかは、このままでは判然としない。橋本町や勝間田町の町名が成立する時期が確定できないからである。

以上のように、「林田町」と「新町」の意味を理解すると、寛永3年(1626)以降のある時点で、「林田町」が分割される形で、橋本町・林田町・勝間田町の名称が成立し、また、「新町」が東西に分かれて、西新町と東新町ができたと考えられる。

この「東作誌」や『武家聞伝記』の記述そのものの真偽を他の資料で検証することは、今のところできない。ただ、後述する中之町の成り立ちに関する資料との整合性からは、明らかな矛盾も無く理解することができる。そこで、「林田町」と「新町」との間に成立した中之町の成り立ちについての考察が必要となる。

「中之町」の成り立ち

中之町の名については、

「新町と林田町との中間にある故名あり」

とあって、「新町」と「林田町」の中間にあることに由来するという(『東作誌』)。既に見たように、『東作誌』の記述の理解から、「新町」は東新町と西新町を合わせた町並みであり、「林田町」は、橋本町・林田町・勝間田町を合わせた町と考えられる。

正保2年(1645)の絵図によれば、宮川以東に形成されていった「林田町」から東には、街道沿いに足輕屋敷が続いていた。そして、その更に東にも、新しい町人の町並みが形成されていた(正保2年『美作国津山城絵図』、『津山城資料編』所収)。

『武家聞伝記』卷第十五によれば、正保2年(1645)の春に、

「古魚町行当ニ富田権之丞伴善助両町奉行屋敷雖有之町屋ニ被仰付林田町と新町と之間ニ足輕屋敷雖有之是も町屋ニ被仰付」

とあり、古魚町の突き当たりであった町奉行屋敷と共に、「林田町」と「新町」との間にある「足輕屋敷」の町屋敷地への変更が決定された。

この後の経過として、正保4年(1647)、森藩は中之町分の足輕屋敷地を払い下げ、そこに新しく町人町が形成された。この経緯は、元禄11年(1698)、津山に入ったばかりの松平藩によって、林田十九軒屋敷の由来が調べられたとき、藩に提出された覚書によって知ることができる。この林田十九軒屋敷は、城東ではあるが、街道に面した町人地の裏筋にある屋敷地で、藩からの拝領地ではなく、所有権のある土地であったため、藩がその由緒を調べたものである。

元禄11年(1698)7月24日に高助から提出された「覚」には、

「私屋敷之事正保四年ニ林田中之町売地ニ従御公儀被仰付候ニ付(中略)私祖父田中権右衛門従御公儀買申候(後略)」

とあり、正保4年(1647)に林田中之町の屋敷地が払い下げられたことが分かり、『武家聞伝記』に見られる足輕町から町人地への変更が伺われる。但し、田中権右衛門が購入したのは、中之町の敷地ではなく、中之町続きの武家地であった。

また、同じく元禄11年(1698)8月2日に「覚」を提出した瀬田屋又兵衛によれば、元「せんた之町」と

呼んでいた、上之町から「土手迄つきぬけ」の道があったが、50年以前に「表屋敷裏土手へ之道通り迄私買置」き、その結果街道筋から南の土手へ抜ける横町が無くなり、又兵衛が屋敷内の通り道として利用しているとす。この瀬田屋又兵衛は、中之町の南側に住居を構える町人で、元禄10年(1697)10月の『美作国津山家数役付惣町豎横関貫橋改帳』にもその名が見える。

そして、この時に全体では、上之町から降りてきて南の土手にまで通じていた数本の横町の道のうち、二本が中之町の南側の部分で町屋敷地に取り込まれ、街道筋から南の土手に通じる道筋が少なくなった(「覚」、林田十九軒屋敷吟味書類、『矢吹家資料』子の上、7-15)。

この消えた横町については、正保2年(1645)の『美作国津山城絵図』(『津山城資料編』所収)と元禄以降に製作された『津山城下町絵図』(『津山城資料編』所収)との比較によって確認できる。

このように、中之町は、正保2年(1645)から正保4年(1647)にかけて、足軽屋敷の払い下げによって町人地となっていったのであり、その時点では、足軽屋敷の西と東にある町は、まだ「林田町」と「新町」と呼ばれていたことが分かる。

おわりに

ここまで、「林田町」と「新町」を通して、城東地域町並みの成り立ちの一端について考えてきたが、六町それぞれの成立については未だ明らかにできない。しかし、それぞれの町が関連もなく個別に成立していくことは考えられず、相互に関係を持ちながら成立していった筈である。最後に、そうした意味で、今後の参考として、成り立ちに特徴のある橋本町と上之町にも少し触れておきたい。

橋本町は、宮川大橋の東詰に屈曲して南北に長く形成された町人町で、町の名はこの橋に由来する。町を抜けて宮川に達する屈曲した小さな道筋が北側にもあり、そこは袋町と呼ばれていた(『津山画図』多胡家資料、当館蔵)。江戸時代の初期には、この袋町から対岸に宮川橋が架けられており、橋が南に架け替えられることによって現状の橋本町ができたという伝承がある(『鶴府古談』玉置家資料、当館蔵)。関連は不明だが、近年、宮川大橋上手の川底から、丸い穴を穿った数個の礎石が見つかっている(当館蔵)。

また、森藩では、丹後山南面の丘陵地の上手に多くの寺院を配し、その下手広範囲に歩小性や鷹師、足軽の町を置き、その辺りを概して上之町と呼んだ。小区画の屋敷地を多数配置するため、傾斜に沿って南北方向に数多くの小路が設けられ、小路にはそれぞれ名前が付けられている(『津山誌』、『東作誌』)。

松平藩時代にも、中下級の武士が住んだが、武家町には町内組織が存在しないため、町としての厳密な区画はなく、上之町の一部には林田村の農民も居住していた。彼ら農民は、林田上之町の住人であるが、城下町を管轄する町奉行ではなく、村々を管轄する郡奉行や郡代の管轄であった。

このような、城下町と在方という観点からは、その中間に位置する「萱屋町」も課題として残る。これは、城下町初期にその東西の端に設置された在分の町並みであるが、後には、東西の萱屋町は異なった道筋を辿ることとなった。城下町の成り立ちを探るための課題はまだ多い。

博物館入館案内

- 開館時間：午前9:00～午後5:00
 - 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
 - 入館料：一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料
- ※()は30人以上の団体

大博物館だより No.64 平成22年3月10日

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ☎(0868)23-9874
E-mail : tsu-haku@vtv.ne.jp
印刷：株式会社 津山朝日新聞社